

文化財が物語る桶川市の歴史

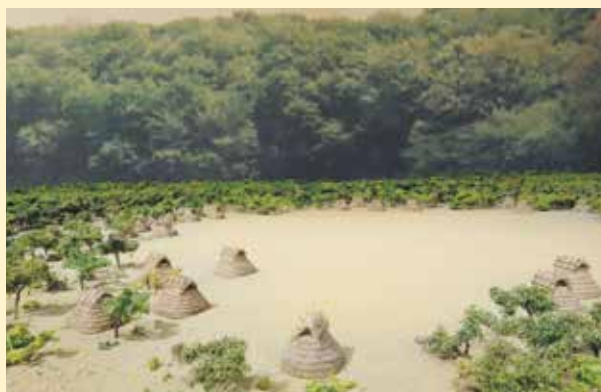
人々の生活のはじまり。

赤土(関東ローム層)の中から発見される小さな石器は、一万年を超える昔、桶川の地に、最初の住人がいたことを伝えています。氷河時代といわれる寒冷な気候のもとで、人びとは鋭利な石器を手に狩りの暮らしを営んでいました。

やがて日本列島は次第に暖かさを取り戻し、桶川の大地は森におおわれていきます。森とともに生きた縄文時代の人びとは、桶川にたくさんさんの遺跡を残しています。



ナイフ型石器(愛宕西遺跡出土)



高井遺跡集落復元模型

高井遺跡

桶川西小学校の校舎の建設に先立って昭和43(1968)年に発掘調査が行われた高井遺跡は、縄文時代中期(5000、4000年前)の村の遺跡です。住居跡からは、すばらしいデザインの縄文土器がたくさん発見されています。

これらの土器は、木の実などの森の恵みを調理するために使われました。



高井遺跡出土品(市指定文化財)

後谷遺跡

桶川市赤堀の後谷遺跡は、縄文時代後期から晩期(4000、2500年前)に営まれた水辺の遺跡です。この遺跡は川沿いに堆積した厚い粘土層の下にあり、豊富な地下水に浸されていたために、縄文人の食糧となった木の実や動物の骨、丸木弓や漆塗櫛などが使われた時の姿を保って出土したことで注目されました。特に優れた645点の出土品は国指定重要文化財に指定されています。

後谷遺跡に暮らした人びとが遺した精巧

ミミズク土偶(国指定重要文化財)



朱漆塗櫛(国指定重要文化財)



耳飾り(国指定重要文化財)



な文様をもつ耳飾りや硬玉(ヒスイ)製のペンダント、漆塗櫛をはじめとする漆工品などの出土品は、縄文時代の工芸文化の水準の高さを今に伝えています。

まつりに使ったミミズク土偶も、漆によって鮮やかに彩られています。一万年以上も続いた縄文時代が終わろうとするこの時代、気候が寒冷となり、暮らしは厳しさを増していたといわれています。豊かな森の恵みを願う人びとの祈りは切実なものだったことでしょう。

古代の国づくりと桶川。

弥生時代後期になると、東海地方から東台湾岸を経て、稲作を行う人びとが桶川に村を作り始めます。川田谷地区の八幡耕地遺跡からは、種もみをたくわえたであろう美しく飾られた壺が出土しています。やがて、稲作の村は、荒川や江川に沿って広がっていきます。

3世紀になると奈良県の南部に古墳が築かれるようになり、近畿地方を中心として古墳をつくる文化が各地に伝えられ、国としてのまとまりが育っていきました。

熊野神社古墳

埼玉県の中央部にあたる荒川や入間川の流域は、県内でもいち早く古墳文化が展開したところとして知られています。4世紀の後半、荒川に江川が合流する低地を見下ろす川田谷地区の台地の上に熊野神社古墳が築かれます。

この古墳は、直径約40m、高さ約6mの円墳で、現在でも古墳の姿がよく保存されています。古墳の頂上には熊野神社がまつられており、古墳の名の由来となっています。

昭和3(1928)年に社殿を改築した時、粘土の塊のなかから大量の玉類をはじめとする副葬品が発見されました。出土



熊野神社古墳(県指定文化財)

熊野神社古墳出土品(国指定重要文化財)



品は、地元の人びとの努力で散逸をまぬがれ、貴重な古代史の資料として国指定重要文化財に指定されています。

大形の管玉や硬玉(ヒスイ)やメノウ製の勾玉をはじめとする出土品は、近畿地方の勢力との交流を物語り、筒形銅器は朝鮮半島南部でも同じものが発見されています。

川田谷古墳群

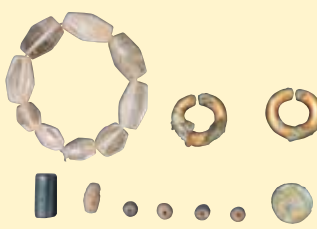
5世紀になると、古墳時代は新たな展開を迎えます。大阪平野に大山古墳(仁徳天皇陵)に代表される巨大な前方後円墳が集中して築かれるようになり、近畿地方の大王を中心とする国づくりが進んでいきました。

埼玉県においては、行田市の埼玉古墳群にみられるとおり、近畿地方の大王と深いかかわりをもった豪族が5世紀から6世紀にかけて前方後円墳を次々と築きました。

桶川市の西部にあたる川田谷



原山古墳群(市指定文化財)



城髪山2号墳出土品



ひさご塚古墳出土品

地区には、かつて70基あまりの古墳があったことが記録され、後に川田谷古墳群と呼ばれています。この古墳群は、6世紀の後半から7世紀にかけて築かれた小規模な円墳からなっていました。その多くは消滅してしまいましたが、川田谷地区北部の雑木林の中に原山古墳群として9基の古墳が保存されています。

川田谷古墳群から出土した埴輪や装身具などの副葬品は桶川市歴史民俗資料館に展示されています。

形作られる桶川の骨格 ― 鎌倉時代・室町時代 ―

今に続く、桶川の地名が歴史資料にあらわれるのは、中世と呼ばれる鎌倉時代から室町時代のことです。

12世紀の源平の騒乱期から鎌倉幕府の創立期に活躍した武蔵武士である足立遠元の事績が、軍記物語や鎌倉幕府の記録である『吾妻鏡』に記されています。足立遠元は桶川市末広や川田谷地区に館を構えた



泉福寺

とも伝えられ、その子である遠村が河田谷を名字としたと記録されています。

また、桶川の名は、南北朝時代にあたる観応3（1352）年に、足利尊氏が参戦した武士に与えた「桶皮郷」としてあらわれます。

伝足立右馬允遠元館跡碑
(市指定文化財)

東叡山勅願院円頓房泉福寺と 木造阿弥陀如来坐像

川田谷の泉福寺は、古い由緒を伝える市内を代表する寺院です。寺伝では、平安時代の天長6（829）年に淳和天皇の勅願により慈覚大師円仁が開基したとも伝えられています。

鎌倉時代の泉福寺は、河田谷殿の保護のもとで比叡山延暦寺から信尊上人を迎えて天台宗の学問寺として栄え、当時の繁栄を物語る文化財として木造阿弥陀如来坐像が伝えられています。

この像は、胎内の銘文から鎌倉時代の弘長2（1262）年に造立されたと知ることができ、その姿は平安時代以来の優美な定朝様式の面影を伝え、後世に補われた勢至菩薩と観音菩薩の立像とともに大堂に安置されてきました。現在は、境内の収蔵庫に大切に保管されています。



木造阿弥陀如来坐像(国指定重要文化財)

武士の館 ― 加納城跡と三ツ木城跡 ―

鎌倉時代から戦国時代に至る中世は、武士が歴史を動かした時代です。戦国時代には、埼玉県内でも有力な城があった川越と岩槻(岩附)を巡る戦いの記録が数多く残されています。

桶川は、川越城と岩附城を結ぶ街道沿いにあたり、市内西部には三ツ木城、東部には加納城の遺跡がそれぞれ現存しています。

加納城は、県内でもいち早く発掘調査



加納城模型

が行われた城跡として知られています。川越から古河に至る街道から岩槻に至る古道が分岐する地点にあり、発掘調査によつて、かつては内郭と外郭のそれぞれに堀と土塁(城壁)を備え、総面積は約43000㎡に達していたことがわかりました。現在は、大部分が住宅団地となり、わずかに土塁の跡をとどめるばかりとなっています。

三ツ木城は、川越に至る街道と岩附城の出城であった石戸城から南下する道が交差する地点にあり、土塁と堀が三角形に二重に巡る堅固な城として知られています。

戦国時代後期の北武蔵では、岩附城と川越城と松山城の間で、しばしば攻防戦が繰り広げられていました。これらの城の中間に位置する三ツ木城は、戦いに際して、街道の交通を押さえる拠点として使われたと推定されています。



三ツ木城跡実測図

江戸時代の平和と中山道桶川宿の繁栄。

関東の戦国時代は、豊臣秀吉による小田原合戦を経て、徳川家康が天正18（1590）年に江戸に入ったことをもって終わります。その後、慶長8（1603）年に徳川家康は、征夷大將軍に任官して江戸に幕府を開き、幕末に至るまで続く平和が築かれます。

倉田の明星院は、徳川家康の保護を受けた寺院であり、埼玉県指定文化財に指定されている戦国時代から江戸時代初期の貴重な文書が伝えられています。

明星院文書は、徳川幕府が宗教を保護し、平和を開いていくことを伝えています。



埼玉県立文書館収蔵 明星院文書 No.10『徳川家康法度』(県指定文化財)

中山道桶川宿

中山道は、徳川家康が天正18年に江戸に本拠を置いた後、東海道とともに江戸と京を結ぶ街道として整備が進められました。やがて、関ヶ原の合戦を経て、江戸幕府の全国支配が確立する中で、五街道と伝馬制度が整えられ、寛永12（1635）年には三代將軍家光によって参勤交代の制度が確立しています。

宿場には、参勤交代の大名の宿泊にあたる本陣と、街道を行きかう物資を運ぶための人や馬を備える問屋場が必ず設けられていました。桶川宿本陣は、遺構の一部を今に伝え、「桶川宿本陣遺構」として埼玉県指定文化財となっています。

宿場の開設当初に近い寛永2（1625）年に58軒に過ぎなかった桶川宿の家数は、寛政12（1800）年には247軒に増えてい

ます。このころには、旅人が泊まる旅館や商家が軒を連ね、紅花が桶川宿の特産物として知られるようになりまし



桶川宿本陣遺構(県指定文化財)



桶川宿商家店先絵馬

市指定文化財

この絵馬は、上州館林の商人であった米屋勝右衛門(正田家)と近江商人小泉榮助らによって、文久3（1863）年に桶川宿の布屋庄左衛門の屋敷神である稻荷社に奉納されたものです。店先を詳細に描き、蔵の前に積まれた荷駄は紅花であるといわれています。

ちからいし 力石

市指定文化財

幕末にあたる嘉永5（1852）年2月の初午に、江戸の力士である三ノ宮卯之助が持ち上げたことが記されている力石です。「大磐石」の文字とともに、石を提供した大阪屋清右衛門と世話人となった桶川宿の有力な商人の名が刻まれています。



紅花商人寄進の石燈籠

市指定文化財

現在、桶川稻荷神社の社殿の前にある一対の石燈籠は、安政4（1857）年に宿内の不動堂に寄進されたものです。紅花商人中と刻まれ、台座には桶川宿を始めとする24名の紅花商人の名が連なっています。



桶川に生きた人びとは、長い歴史の中で豊かな文化を育んできました。現代の桶川においても、市民が伝える伝統行事や芸能をとおしてわたしたちは確かな伝統の姿を知ることができます。



桶川に生きた人びとは、長い歴史の中で豊かな文化を育んできました。現代の桶川においても、市民が伝える伝統行事や芸能をとおしてわたしたちは確かな伝統の姿を知ることができます。



万作

桶川市の西部、川田谷と日出谷地区では、かつて、多くの人びとが万作を楽しむ伝統がありました。万作とは、江戸時代後期から明治にかけて流行した歌を取り入れた手踊りで、銭輪、きさき、伊勢音頭、口説などの演目が伝えられています。



中山道をはじめとする道は、文化交流の道でもありました。道を行き交う人びとが新たな歌や踊りをもたらし、桶川の人びとはこれを暮らしに取り入れ、自らが演じ、楽しむ芸能として育んできました。

書きしるすの芸能

松原の真言

県指定無形民俗文化財

桶川市の農村部では、高齢の女性は「おとき念仏」の仲間に入り、亡くなった村人の供養を担うことが広く行われていました。川田谷の松原地区では、念仏の仲間から、光明真言を唱えながら太鼓をたたき、撥を投げかわす芸能が生まれ、今日まで伝承されています。



餅つき踊り(接待餅)

祝いの日の餅つきが芸能化した祝儀芸です。かつては、帯解きの祝いや上棟などに演じられていました。現在、日出谷、狐塚、薬師堂の各地区で行われ、神社の祭りのほか、市のイベントにも招かれて演技を披露しています。

餅をつく所作の中に、木遣り、万作、麦打ち唄などの身近な歌が取り入れられ、臼の周りで技巧を尽くして餅をつく動作は見事です。つきあがった餅は観衆にふるまわれ、祝いの喜びを皆が分かち合う芸能です。



現代に生きる桶川のまつりと芸能

桶川に生きた人びとは、長い歴史の中で豊かな文化を育んできました。現代の桶川においても、市民が伝える伝統行事や芸能をとおしてわたしたちは確かな伝統の姿を知ることができます。

桶川祇園祭

―受け継がれる中山道桶川宿の伝統―

桶川の街では、桶川祇園祭が毎年7月15、16日に行われています。この祭りは、中山道桶川宿の路上にまつられていた市神社の祭礼として江戸時代の中ごろにあたる元文3(1738)年に始まったと伝えられています。

夏の悪疫退散を願う市神の祭りは、桶川宿の繁栄とともに華やかさを増し、江戸時代後期から幕末にかけて、各町内に人形をいただいた山車や獅子頭(夫婦獅子)が作られるようになりまし。

明治以降も、その伝統は受け継がれていきました。桶川では、「麦の始末は祇園まで」という言葉が伝えられています。村の若者たちは、祇園祭までに麦を桶川の問屋に納めようとうがなばり、出荷後は祇園祭に繰り出し、祭囃子の技を競いました。

桶川市が市制を施行したころには子どもたちがお囃子

和宮様御参向御行列附

江戸時代も終わりに近い文久元(1861)年に行われた皇女和宮の江戸下向では、桶川宿は大きな役割を果たしています。

10月20日に京を発った和宮の一行は、11月13日に桶川宿に到着し、京から江戸の將軍家に降嫁する皇女和宮の宿泊にあたっています。翌朝、江戸へ向かう和宮一行のために、桶川宿は、周辺の村むらと協力して馬1799頭と人3万6450人を桶川宿に集め、行列の交通を支えました。

江戸時代の平和の中で繁栄した中山道桶川宿は、慶応4(1868)年に江戸幕府が倒れ、中山道の交通を支えた役割を終えます。その後、明治16(1883)年に上野と熊谷を結ぶ鉄道が開通し、明治18(1885)年には桶川駅ができて、鉄道が人や物を運ぶようになりました。そして、桶川宿は、明治22(1889)年に桶川町として新たな歩みを始めます。

桶川宿の履歴を伝える街並み

街の履歴を物語る建造物

旅人が行き交い、紅花商人の繁栄を伝える中山道桶川宿、そして、近代の桶川を支えた麦の取り引き、こうした街の履歴を物語る建物が現在の市街地に遺されています。

これらの建物には伝統を大切にす桶川の人びとの思いがこもっています。桶川市ではこれらを文化財に指定あるいは登録し、未来のまちづくりに活かすよう努めています。

矢部家住宅

市指定文化財

矢部家は木半の屋号で知られた穀物問屋で、江戸時代には紅花商人としても活躍していました。店蔵は明治38(1905)年に建てられ、棟礼には、川越の「亀屋」建築に係わりの深い大工や左官のほか、地元の大工、鳶、石工らが名を連ねています。



小林家住宅主屋

国登録有形文化財

小林家住宅は、江戸時代末期に建てられた旅籠です。文久元年の『和宮下向桶川宿割書上』には「吉右衛門」の名が記されています。その「吉」の字が刻まれた屋根の鬼瓦が、今も同家で保存されています。



島村家住宅土蔵

国登録有形文化財

天保7(1836)年の建築と伝えられ、桁行6間、梁間3間の総3階建ての土蔵で、市内に現存する貴重な建物です。島村家は、桶川宿場内の穀物問屋で、屋根の両端にある鬼板には、屋号の木嶋屋の「木」の字が刻まれています。



島村老茶舗店舗兼主屋

国登録有形文化財

島村老茶舗は、嘉永7(1854)年に創業した茶商です。屋号は「丸木」といい、165年の歴史がある商家です。現在残る店舗建物は、大正15(1926)年に建てられ、当時の姿をそのままとどめています。上質な木材が使用され、細部にわたり丁寧な造りを見ることができ、当時の商家の規範となる貴重な建物です。



武村旅館

国登録有形文化財

武村旅館は嘉永5(1852)年に建てられた旅籠で、現在も旅館を営んでいます。建築当時の間取りが今もほぼ引き継がれており、かつての旅籠の姿を今に伝える貴重な建物です。

